

令和5年度 県立みなみのかぜ支援学校 学校評価報告書

令和6年2月28日

1 学校経営ビジョン

ノーマライゼーションの理念に基づき、全ての教職員が**鋭い人権感覚をもち**、一人一人の児童生徒に対して**専門的な教育を充実させ**、将来の自立や社会参加の基礎となる力を育てることで、保護者や地域から**信頼され、笑顔あふれる学校**を目指す。

2 本年度の重点目標

- (1) 自ら選択し主体的に生きることのできる児童生徒の育成
- (2) 可能な手段で自分の意思を示すことのできる児童生徒の育成
- (3) 防災体制の整備
- (4) 笑顔あふれる学校
- (5) 子どもが変わる確かな指導

3 学校関係者評価の視点

・自己評価項目や指標等の妥当性・自己評価結果の妥当性・成果と改善策の設定の妥当性

4 評価基準

A：大変良い B：良い C：努力が必要 D：改善が必要

5 評価内容（PDCA サイクルに基づく）

- (1) 本年度の重点目標を踏まえた具体的取組事項の設定【Plan（計画）】
- (2) 学校教育目標に基づいた教育活動の実践【Do（実行）】
- (3) 学校職員によるアンケート及び保護者アンケートに基づく評価【Check（測定・評価）】※
- (4) 次年度に向けた具体的改善策の提案【Action（対策・改善）】

※アンケート実施機関 学校職員：令和6年1月18日～1月26日（回答数107名）

保護者：令和6年1月19日～1月26日（回答数128名）

目標 I チャイルドファーストを柱とした教育活動

(1) 具体的取組事項【Plan】

- ①行事や授業参観を通して、児童生徒の自主性を尊重し、選択場面を設定した教育活動を推進する。
- ②障がいに関する専門的研修や人権教育研修等を通して、正しい障がい観の育成に努める。
- ③各種スポーツ大会やコンクール等への積極的参加を推進し、発表や自己表現の場の設定に努める。

(2) 学校教育目標に基づいた教育活動の実践【Do】

- ①感染症対策について具体的な対策を講じながら、合同学習や校外学習、学校間交流などの教育活動を再開することができた。運動会や虹色祭については、学部別の開催であったが、コロナ過以前に近い形で実施することができた。保護者の参観についても、人数を制限せずに行った。修学旅行についても、全ての学部において県外で実施することができた。
- ②障がいのある児童生徒へのICT機器の活用について、校内研修で取り組むとともに、校外研修へも積極的に参加した。タブレット端末を使った具体的実践例についても、職員間での共有がなされている。
人権同和研修九州大会に各学部から代表者が参加し、人権意識の高揚と周知を図った。
- ③スポーツ面では、県高校総体へ8名の生徒が参加した。障がい者スポーツ大会にも中学部4名、高等部12名の生徒が参加し、その他多くの記録会や大会に参加することができた。
文化・芸術面では、高等学校総合文化祭のオープニングに高等部3年生21名が参加した。また、例年開催しているなないろ作品展を本年度も宮交シティで開催し、小中高全ての学部の作品を展示することができた。アート展では、立体部門で会長賞に中学部3年生、写真部門で全国推薦賞を高等部2年生が受賞した。

(3) 学校による自己評価【Check】

B

(4) 改善策【Action】

- ①今後も感染対策等、児童生徒の安全を確保した上で、体験活動を中心とした多様な教育活動に取り組む。
- ②ICTや自立活動の考え方についての研修が必要である。人権教育に関する職員研修や掲示の充実を図る。
- ③各種大会への出場機会を多く確保し、児童生徒の自己表現の場を多く設定していく。

(5) 学校関係者による評価

A

(6) 具体的意見

- ・学校行事はコロナ前に近い形で開催できた。高等部の販売も感染対策を図りながら実施されてよかった。
- ・ICT機器はどう活用されているか保護者も把握できるとよい。・様々な学びを進めてもらっている、安心して子どもを預けられる。
- ・参観日でICT機器の活用が進んでいる様子を見る機会があった。今後も進めてほしい。
- ・スポーツ活動は、小学部の時に参加し、楽しかった様子だった。ただ、一歩踏み出す勇気がないので、参加しやすいアプローチの方法があるともっと参加者も増えるのではないかな。
- ・今までは、参観日も制限があり、保護者とのつながりが深められなかったが、今年度は再開できてよかった。修学旅行も次年度も実施できるとよい。
- ・ICTは使っている姿を見て把握していないので、他の保護者や先生に聞いて、情報として持ってみたい。
- ・スポーツ活動は、チラシは持ち帰るが、参加はできていない。一歩踏み出せるとよい。学校から配布される資料はありがたい。
- ・チャイルドファーストを柱とした教育活動が多くなされていると感じる。今後も授業はもちろん音楽活、芸術等を通して夢、希望、やる気をもたせられるとよい。成長発達の段階において、その都度悩みがあると思うので、**人生プランを真剣に一緒に考えていただき少しでもゆとりをもった教育活動**ができるとよい。
- ・各段階の壁で心の支えとなって救われたことが3つある。1つ目は子供の笑顔、2つ目は子供の障がいに理解のある寄り添ってくれる先生、3つ目は壁にぶつかった時、PTAで知り合った親との交流だった。
- ・入学式や虹色祭に出席し、まさしく笑顔あふれる学校であると感じた。廊下に貼られた修学旅行や校外学習等の掲示物にも表れていた。加納小の子供たちも交流活動を楽しみにしている。よい交流ができています。
- ・保護者同士の関わりがうすくなっていかないように工夫してPTA活動を行ってほしい。
- ・ICT機器→社会で触れる機会が多くなる、保護者にも見える形で取り組めるようになってほしいのでは。

目標Ⅱ 防災体制の整備

(1) 具体的取組事項【Plan】

- ① 実際場面に応じた、避難訓練や緊急時対応訓練を計画・実施する。
- ② 災害時の保護者への引き渡し訓練を実施する。
- ③ 防災袋や備蓄品の整備を行う。
- ④ 福祉避難所に関する研修やマニュアルの作成を通じて、福祉避難所に関する理解を深める。

(2) 学校教育目標に基づいた教育活動の実践【Do】

- ① 年間3回の避難訓練を実施した。1月の地震を想定した避難訓練では、がれき体験や起震車体験を行い、実際の場面をイメージしやすいように訓練を行った。放送設備が使えない状況も想定した訓練を実施した。毎回、校長よりプレゼンテーションによる振り返りがリモートで実施された。
- ② 引き渡し訓練については、5月の6施設合同防災訓練時に実施した。平日の実施ということもあり、保護者の参加率については課題が残った。(本年度参加保護者 名)
- ③ 防災袋については、学期始めと学期終わりに各家庭より準備することができた。また、PTA予算でも新たに備蓄品を購入することができた。
非常食体験を実施し、実際に非常食を作って試食することで、児童生徒の実態把握や保護者との連携を図ることができた。PTA家庭教育学級においても試食会や備蓄庫の見学を実施し、災害時の備えについて協議することで防災意識の向上につながった。
- ④ マニュアルについては、昨年度作成した物を再点検することができた。

(3) 学校による自己評価【Check】

B

(4) 改善策【Action】

- ① 様々な緊急事態を想定した訓練の方策を今後も探っていく。
- ② 引き渡し訓練の意義の周知とより実践的な訓練への発展させる。
- ③ 定期的に事務室で備蓄品の管理や整理を行うことができたが、PTA活動の一環として、定期的な在庫管理ができないか提案していく。防災リュック置き場の検討と職員の防災袋の準備も必要である。
- ④ 協定福祉避難所に関する研修を実施する必要がある。

(5) 学校関係者による評価

B

(6) 具体的意見

- ・1月の地震や航空機事故で、日頃の実践の大切さを実感している。形式的なものではなく実践訓練をしていかなければならない。様々な情報を共有するしくみの整備が必要。施設でも研修をしたが、どうすれば安全に避難できるか、グループホームにいる利用者さんにどう対応して避難すればよいか。パニックなどへの対応ができるよう実践的に地域との防災訓練を実施していきたい。
- ・防災訓練を通して、子供たちに緊急事態は起きると意識が広がっていくとよい。
- ・引き渡し訓練は、毎回スムーズに誘導してもらっているが、実際に災害が起きた時は、学校までたどり着かずしばらく待機もある。保護者から迎えが遅れる連絡など、防災メール等の訓練も取り入れていけるとよい。漠然とだが、緊急メール対応訓練のようなもの。
- ・職場では、スマートフォンで2ヶ月に1回防災訓練がある。無事かそうでないか、出勤できるかできないかや書き込みもチェックできる。普段の訓練から、返信しないとメールがくる。迎えに行けない場合、どう伝えればよいか。学校にも別の連絡ツールもあっていいのではないかと。通信機器も発達してきているので、検討してもらえるとよい。
- ・業者の都合で給食が止まった時、防災食についての提案をしたら学校が早急に対応してくれた。今回のことで、防災食を食べて子供たちの実態把握ができ、防災バッグの中身等についても家庭にフィードバックしてもらえた。PTAでも備蓄庫の見学や防災食の試食を行い、臨機応変に動く必要があることも学び、防災意識の向上に繋がったと思う。
- ・引き渡しは参加できなかった。仕事をしている保護者も多く、生活も変化し休みが取りづらい状態である。次年度はPTA総会時に実施できるよう変更してもらい、がんばってもらっている。
- ・メールは受信はできるが、返信はできない。五ヶ瀬中等学校はグループフォームで何時に迎えに行けるか返信できるようになっている。
- ・防災マニュアルについては毎年見直しが必要なので、今回の委員の方々から意見を参考にして改善していけるとよい。

目標Ⅲ 学校経営ビジョンの周知・徹底と笑顔あふれる学校

(1) 具体的取組事項【Plan】

- ①常に笑顔で児童生徒や保護者、職員とのあいさつ励行に努める。
- ②「できた!」と感じさせる授業作りを行う。
- ③課題に対し、チームで関わり、チームで解決を図る。
- ④教育公務員としてコンプライアンス遵守を意識して行動する。

(2) 学校教育目標に基づいた教育活動の実践【Do】

①職員アンケートによるプラス項目は96%と高い数値であり、日常的にあいさつの励行に努めることができた。朝の送迎時の保護者からの引き継ぎ時も、笑顔で対応ができた。児童生徒会のあいさつ運動を実施した昨年度の保護者アンケートの反省を受けて、質問内容を整理したことで、様々な表現方法でのあいさつや意思表示等の力が高まっていることが伺えた。

「なかフェス」は子供たちの得意なことを披露する憩いの場となっており、毎回多くの笑顔が見られた。

②職員アンケートによるプラス項目は92%と高い数値であり、日常的に子供の良い点を認める教育活動を実践することができた。教室内外の作品掲示も効果的に行われ、児童生徒の学習状況を発表する場となった。

③職員アンケートによるプラス項目は89%という数値であり、毎朝の学部職朝が、情報交換の場として機能している。役割を分担しながら、チームで課題解決を図ることができたが、日頃から相談しやすい環境づくりに努めた。

④コンプライアンスに関する研修を2回実施し、冬の研修会では、次年度のコンプライアンス標語について全職員で考えた。「みな*コン標語」として、月毎に職員を目に止まりやすい場所に掲示した。

(3) 学校による自己評価【Check】

B

(4) 改善策【Action】

- ①言葉によるあいさつが難しい児童生徒の様々な表現方法を把握し、今後も家庭と連携を図っていく。
- ②本校に在籍する2名の指導教諭の実践について、今後も広く周知し、自主的な研修も推奨していく。
- ③支援会議の計画的実施に向けて、学部会、学年会での情報交換の充実を図る。
- ④コンプライアンス遵守のための高い規範意識の育成と同時に、肯定的に取り組む雰囲気づくりを進める。

(5) 学校関係者による評価

A

(6) 具体的意見

・通常の学校生活だけでなく音楽の取組の成果があるのでは。子どもの様子から分かる。

・毎日、学校に休まず楽しんで行ってくれる。

・毎日「今日はこれがあった、明日はこれがある。」と報告してくれる。楽しく関わり、楽しく生活できている。

・日頃の声かけや寄り添う姿勢、褒めるときはしっかり褒める。イベント等で、夢、希望をもたせていることを今後も大切にしてほしい。職員も笑顔で対応していると感じる。施設でも目標にしたい。

・多くの職員がいる中で、考えを一つにしてチームで動いていると感じる。協力し、一人一人のことを理解して動いてもらえると思う。

目標Ⅳ 子どもが変わる確かな指導

(1) 具体的取組事項【Plan】

- ①児童生徒一人一人の実態とニーズに応じた目標設定を目指す。
- ②児童生徒のわずかな成長にも気づき共に喜ぶことで認める指導を行う。
- ③関係機関と情報を共有するとともに、連携を図る。

(2) 学校教育目標に基づいた教育活動の実践【Do】

- ①職員アンケートによるプラス項目は93%と高い数値であり個別面談期間を設定し、一人一人の教育的ニーズを十分に把握した上で、個別の指導計画や教育支援計画の作成に役立てることができた。
- ②職員アンケートによるプラス項目は96%と高い数値であり、児童生徒の良さを認める指導が定着している。校内での問題行動も少なく、生徒指導上の大きな課題も少ない。落ち着いて学習に望む姿がみられる。
- ③ひまわり学園や青島学園とは、日常的に情報交換を行うことで、入所児童生徒の状況について共通理解することができた。必要に応じて関係機関を交えたケース会を開催し、情報の共有を行った。

(3) 学校による自己評価【Check】

B

(4) 改善策【A】

- ①職員アンケートによるプラス項目の内訳では、「どちらかといえばそう思う」の意見が多かった。ニーズに応じた目標設定と支援が十分に行えるよう保護者との連携、学年、学部での情報共有をさらに図っていく。
- ②現在の特別支援教育の主流はPBS（ポジティブな行動支援）である。今後も、日常の中で「できていること」「がんばっていること」に着目して支援する方法が定着するようにしていく。授業や1日についての振り返りを確実にし、達成感や自己肯定感を高め、明日への意欲につなげていく。
- ③次年度以降も定期的な情報交換の会を設定し、気になる児童生徒の情報について早めに共通理解していきたい。

(5) 学校関係者による評価

A

(6) 具体的意見

- ・中・フェス(中庭でのフェスティバル)やPBSの取組等のように子どもが頑張っていることを誉めて、個別の指導計画で段階的に成長を導いていってほしい。
- ・学年が変わる度に、面談で伝えたことがしっかり引き継がれていると感じる。情報共有して支援してもらっていることを評価している。
- ・学年が変わる時の面談での引き継ぎがあまり十分になされていないと感じたことがある。
- ・引き継ぎの認識があまりなかった。保護者からも家庭の様子を情報発信していかなければならなかった。環境設定が必要。
- ・今年度色々変わったので、今後もよい方向に進んでいくとよい。
- ・たくさんの職員がいるため異動が大きい。どう埋めていくかが課題である。教育支援計画、個別の指導計画は一緒に作成していくものであるため、家庭からの情報も含め24時間の生活を意識した成長計画になっていくとよいものになる。